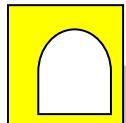


日吉台地下壕保存の会会報

第150号
日吉台地下壕保存の会

「まもる」ということ

会長 阿久沢 武史

鎌倉時代の古典『宇治拾遺物語』に「柿の木に仏現すること」という説話があります。延喜の帝の御時、京の五条天神のあたりに大きな柿の木があり、そこに仏が現れました。大勢の人が集まって大騒ぎをしていましたが、ひとり右大臣殿だけがそれを怪しみました。威儀を正して仏に向き合い、しばらくじっと見つめていると、ついに耐えきれず正体を現しました。人々がありがたく拝んでいたのは、羽が折れて地面に落ちた「くそとび」(ノスリ) だったのです。

これは高校の古典の教科書に載る話です。生徒と一緒に読み進め、私はあらためて古典文学のもつ普遍性と現在性を感じました。人々がこぞって大騒ぎをしている中で、右大臣殿はなぜ冷静でいられたのでしょうか。その理由は本文に次のようにあります。「まことの仏の世の末に出でたまふべきにあらず」、仏法が衰えた末法の世に本物の仏が現れるはずがないという確かな考えがあったからです。彼は堂々たる態度でじっと見つめ、その正体を暴きました。疑うことで本質を見抜いたわけです。興味深いのは、正体を暴かれた「仏」の末路です。木から落ちて羽をばたつかせている「くそとび」は、子供たちにさんざんに打ち殺されました。「にせもの」の無残な最期です。私たちはこれと同じような場面を歴史の中で何度も目になっています。民衆の圧倒的な人気や支持を誇った偶像が、一転して粉々に破壊される。絶大な力を持つ権力者や独裁者がその地位を追われたとき、その先にあるのはみじめな末路です。

いま世界で戦争が起きています。これは私たちにとって決して遠くの出来事ではありません。国家によるプロパガンダや情報統制の中で、人々は何が正しく何が正しくないかを見きわめる目を奪われています。かつて77年前の沖縄戦において、特攻出撃した学徒兵・上原良司は次のような言葉を書き遺しました。「自由の勝利は明白な事だと思います」「権力主義全体主義の国家は一時的に隆盛であろうとも、必ずや最後には敗れる事は明白な事実です」彼が出撃の前夜に記した言葉は、きわめて普遍的で本質的な重さをもって私たちの心に響きます。『宇治拾遺物語』の時代、「見

つめる」は「まもる」でした。古語の「まもる(目守る)」はじっと見ることが原義で、それがやがて現代語の「守る」になります。ロシアがウクライナに侵攻し、戦争の悲惨すぎる現実を私たちはニュースで毎日のように目にします。私たちができることは限られていますが、単なる傍観者であることは「まもること」と異なります。人間が引き起こす愚か

【目次】

- 卷頭言【1-2p】「まもる」ということ 会長 阿久沢武史
議案書【2-5p】第34回日吉台地下壕保存の会・定期総会(議案)
お知らせ【5-7p】第25回戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会概要
報告【7-10p】海軍航空発祥の地/追浜フィールドワーク 運営委員 田中 剛
報告【11p】「第27回平和のための戦争展inよこはま」運営委員 小山信雄
お知らせ【12p】第15期(2022年度)日吉の戦争遺跡ガイド養成講座
出張授業【12-13p】日吉台小学校の感想文から 副会長 喜田美登里
新聞記事【13p】「戦争を主導した日吉台」(沖縄タイムス 2022.3.24)
お知らせ【14p】
パネル展示会(7月:日吉のほんだな、8月:港北図書館)
聞き取り【14-16p】軍国少女・久保田幸子さんのお話 運営委員 遠藤美幸
連載【17-19p】
☆海外の戦跡めぐり(20) ホテル便り(上) 運営委員 佐藤宗達
☆地下壕設備アコレ(34)日吉に先立つバブル地下壕 運営委員 山田 譲
活動の記録【20p】2022.3~6月

な行為の背後にある本質を見きわめようすること、目をそらさずに見つめ続けること、正体を暴こうとすること、それが私たちにできる「まもる」ということだと思います。

日吉は戦争を指導し、命令を出す者たちがいた場所でした。これが戦争遺跡としての日吉の本質のひとつです。八方ふさがりの状況の中で、なぜ戦争を継続したのか、なぜ戦争をやめることができなかつたのか。これは私たちが目にする「現在」の戦争と重なる問題です。古典を読んで「いま」を知るように、過去と現在はひとつにつながっています。私たちが見つめるべきことは、そこにあるのではないでしょうか。

本会の総会は、例年ならば6月に行ないます。もちろん会員の皆様に直接お会いして、前年度の活動報告や今年度の活動方針などについてご意見を頂戴したいところですが、今年度もコロナ感染防止を第一に考えて会報紙上での議案提起とさせていただきます。行き届かない点が多くあるかと存じますが、ご理解とご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

議案書

第34回日吉台地下壕保存の会・定期総会(議案)

今年度の総会も、新型コロナウイルス感染防止の観点から、会員の皆様にお集まりいただく形ではなく、本会報を通じての議案提示とさせていただきます。以下にお示しする報告と提案をご確認いただき、ご意見やご質問等がございましたら、6月30日までに本会報の末尾に記載の連絡先(亀岡・喜田)までお知らせください。それを受け運営委員会で審議し、次号掲載の内容をもって議案成立といたします。

☆2021年度活動報告

◇会員数：個人242名 会報の交換・寄贈団体：95団体

◇第32回定期総会：

2021年6月18日(金)発送の会報146号にて議案書提出

2021年8月25日(水)発送の会報147号にて議案書ご了承の報告

◇運営委員会開催：2021/4～2022/3 8回

◇会報発行：4回 146号(2021.6/18)～149号(2022.3/18)

◇地下壕見学会：2021/4～2022/1 13回 408人

◇ガイド学習会：2021/3 日吉地区センター 中集会室
2021/5 日吉地区センター 中集会室
2021/7 日吉地区センター 和室
2021/9 日吉地区センター 中集会室
2021/11 日吉地区センター 別館1号室
2022/1 日吉地区センター 中集会室

◇第26回2021平和のための戦争展inよこはま：神奈川県民センター2階 ☆展示無し

5/23(日) 特別企画1 戦争・空襲 (参加者240名)・朗読劇「少女たちの戦争—横浜大空襲」横浜市立日吉台中学校演劇部・報告「5月29日野毛山で—どう逃げ惑ったか」NGOグローカリー・講演「江戸から見る」田中優子さん

5/30(日) 特別企画2 核のない世界を (参加者160名)・発表「探求：核兵器禁止条約」桐蔭学園高校・中等教育学校演劇部・講演「被爆者の願いが条約になった」和田征子さん・「核兵器のない世界に向けて一条約の可能性と課題」山田寿典さん・「非人道兵器を禁止させたもの—地雷廃絶の経験から」目加田説子さん

◇PowerPointチーム会合：日吉地区センター 6/19(土) 7/17(土) 8/7(土) 10/16(土)

◇出張授業 2021.10/16(土) リハーサル(中原市民館1階フリースペース)
 2022.3/10(木) 小学校への出張授業 日吉台小学校6年生71名3クラス
 5時間目 PowerPoint画像を使ってリモート授業を行った ガイド4名

◇6/29(火)、7/1(火) 慶應義塾大学設置講座「日吉学」研究発表を傍聴(来往舎シンポジウムスペース)
 ◇8/16(月) ヤフーニュースに取材記事(対応 阿久沢会長)
 ◇10/2(土)、3(日) 第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東大和大会(東京都東大和市)「コロナ」の影響下、昨年は中止となり、今年「リモート」で開催 2日、3日(全体会・分科会)の両日共、約100名が参加
 ◇11/29(月)「日吉台地下壕の史跡・文化財指定に関するお願ひ」を慶應義塾に提出
 ◇2022.2/26(土) 定例見学会再開に向けてガイドの練習会(ガイド10名で感染防止対策見学ルート・時間の確認 見学者の募集は無しで実施)

☆ 2021年度 決算報告

(単位 円)

費目	2021年度予算	2021年度決算	備考
【収入の部】			
会費	300,000	225,072	175名
見学会資料代	500,000	0	
図書等頒布	100,000	0	
寄付金等	0	21,500	
ガイド講座受講料	0	0	
繰越金	390,836	390,836	
計	1,290,836	637,408	
【支出の部】			
運営費	160,000	56,294	各種会合・打ち合せ等
事務費	120,000	37,973	事務用品費等
印刷費	100,000	41,800	会報・資料等
通信費	300,000	191,407	会報送料等
図書資料費	100,000	5,980	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	9,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	0	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	0	
予備費	130,836	0	
小計		342,454	
差引残高		294,954	次年度繰越金
計	1,290,836	637,408	

以上の通り報告します。

2022年5月30日

日吉台地下壕保存の会

会計 亀岡 敦子



この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子



会計監査 山口 園子



☆2022年度予算(案)(単位:円)

費目	2022年度予算	備考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	294,954	
合計	1,194,954	
【支出の部】		
運営費	160,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	100,000	会報・資料等
通信費	300,000	会報送料等
図書資料費	100,000	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	34,954	
合計	1,194,954	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2022年6月17日

日吉台地下壕保存の会・運営委員会

☆2022年度日吉台地下壕保存の会
運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問(案)

会長 阿久沢 武史

副会長 亀岡 敦子

喜田 美登里

羽田 功

運営委員 石橋 星志

上野 美代子

遠藤 美幸

岡上 そう

岡本 秀樹

岡本 雅之

岸本 正

小山 信雄

佐藤 宗達

佐藤 由香

田中 剛

谷藤 基夫

福岡 誠

宮本 順子

茂呂 秀宏

山田 譲

山田 淑子

渡辺 清

会計監査 熊谷 紀子

山口 園子

中沢 正子

顧問 櫻井 準也

鮫島 重俊

☆2022年度 活動方針(案)

ロシアがウクライナに侵攻し、私たちが生きるこの世界で国家間の戦争が起きています。破壊された都市、近親者の亡骸を前に立ち尽くす人々、地下シェルターでの不自由な生活、小さな子供を連れて隣国に避難する母親、長い人生で再び大きな戦争に巻き込まれた高齢の人たち。ニュースで目にするこうした現実を前に、戦争遺跡の保存に関わる私たちの活動は、これまでにない緊張感を伴うものとなっています。

私たちができることは限られていますが、この会が30年以上にわたって積み重ねてきた活動を、コロナ禍であっても着実に続けていくことに意味があります。一般向けの定例見学会は、限定的な形ではありますが、再開することができました。引き続き感染防止対策を徹底しながら内容を充実させ、定例の回数を月2回に戻せるように努力します。学校関係の見学会は、いわゆる「出張授業」を含め多様な方法を工夫して、各校の平和教育や歴史教育への取り組みに積極的に協力します。最も大きな課題である日吉台地下壕の文化財・史跡指定については、昨年秋に始めた慶應義塾への働きかけを粘り強く継続します。

今年度の活動も依然としてコロナ禍の中にあることが想定されますが、活動方針および予算案は例年と変わらない内容とし、以下のように提案いたします。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 横浜・川崎平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。

報告

第25回全国シンポジウム広島大会を開催します

記念すべき第25回戦争遺跡保存全国大会を、被爆の地・広島で開催します。旧軍都・被爆都市を経て、戦争遺跡保存の原点となった広島から、戦争も核兵器も許さない世界の創造に向けた取り組みを深めましょう。

要項 ～旧軍都・被爆都市を経て、戦争遺跡保存の原点となった広島から、戦争も核兵器も許さない世界の創造に向けた取り組みを深めよう～

期日：2022年8月20日(土)・21日(日)・22日(月)

場所：広島市青少年センター

参加費：一般 1日1,000円 学生以下・障がい者 1日500円

主催：戦争遺跡保存全国ネットワーク 第25回戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会実行委員会

後援：(順不同) 広島県 中國新聞社 旧被服支廠の保全を願う懇談会

廣島・ヒロシマ・広島を歩いて考える会、加害の歴史から広島を考える会

(一般社団法人) ラジカルバナナ

広島実行委員会事務局連絡先 事務局長 多賀俊介(たが しゅんすけ)

〒733-0872 広島市西区古江東町 221-27 TEL:090-6432-5054

080-272-6464 (FAX 兼) Mail taga.s@do2.enjoy.ne.jp

【大会日程と主な内容】

8月20日(土) 全体会・講演会 広島市青少年センターホール

全体会 13:00~ ■受付 12:00~

開会挨拶

記念講演 「ヒロシマの願いを世界へ—平和行政の歩み—」

元広島市国際平和担当理事(兼平和記念資料館館長) 原田 浩 氏

基調講演 戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員 菊池 実 氏

地域報告 広島大学名誉教授 藤野 次史 氏

廣島・ヒロシマ・広島を歩いて考える会 多賀 俊介 氏

全国ネット会員総会 16:10~17:00

8月21日(日) 分科会 広島市青少年センター会議室ほか

分科会 9:00~15:00

第1分科会:「保存運動の現状と課題」(第一集会室)

第2分科会:「調査の方法と整備技術」(第一講義室)

第3分科会:「平和博物館と次世代への継承」(第三集会室)

図書交換会:第一会議室 ※10:00~14:00

閉会集会 15:10~16:00

8月22日(月) 現地見学会 ※別途事前申し込みが必要。定員になり次第締め切ります。

A. 広島市内軍都・被爆遺跡巡りコース

- ・旅行代金: 2,200円 ・募集人員: 40名 ・最小催行人員: 25名
(参加者数が最小催行人員を下回ることとなった場合は実施しません。)
- ・お客様ご集合場所: 広島駅新幹線口(北口) 2階ペデストリアンデッキの中央部分
- ・お客様ご集合時刻: 午前8時40分(時間厳守)・貸切バス出発予定: 午前9時
- ・主なコース: 旧広島陸軍被服支廠、広島県庁北側道路、広島城周辺

B. 呉の軍都遺跡、地下壕巡りコース

- ・旅行代金: 4,700円 ・募集人員: 40名 ・最小催行人員: 20名
(参加者数が最小催行人員を下回ることとなった場合は実施しません。)
- ・お客様ご集合場所: 広島駅新幹線口(北口) 2階ペデストリアンデッキの中央部分
- ・お客様ご集合時刻: 午前8時10分(時間厳守)・貸切バス出発予定: 8時30分
- ・主なコース: 呉長浜地区・地下工場見学(予定)、長迫公園・旧呉海軍墓地、呉空襲犠牲者供養地蔵(和庄児童公園)、防空壕跡等、歴史の見える丘

C. 太田川上流の朝鮮人労働、強制連行中国人労働によるダム建設と補償・和解の取り組みを学ぶコース

- ・旅行代金: 4,700円 ・募集人員: 18名 ・最小催行人員: 16名
(参加者数が最小催行人員を下回ることとなった場合は実施しません。)
- ・お客様ご集合場所: 広島駅新幹線口(北口) 2階ペデストリアンデッキの中央部分
- ・お客様ご集合時刻: 午前8時10分(時間厳守)・貸切バス出発予定: 8時30分
- ・主なコース: 王泊ダムと朝鮮人ダム事故犠牲者名のある慰靈碑、中国電力安野発電所・安野中国人受難之碑

D. 平和記念公園と周辺の被爆遺跡・碑を巡るコース

- ・旅行代金：500円（資料代）
 - ・お客様ご集合場所：広島市青少年センター前
 - ・お客様ご集合時刻：午前9時00分（時間厳守）
 - ・主なコース：平和記念公園を中心に、徒歩で約2時間の行程を予定しています。

報告

海軍航空発祥の街／追浜フィールドワーク

航空技術廠跡・第三海堡遺構・貝山地下壕を巡る

運営委員 田中 剛

桜ほころぶ3月27日(日)は、曇りがちながらも時折薄日がさす穏やかな一日でした。今回は三浦半島の付け根に位置し、戦時中には要塞地帯として地図上でもその詳細を白く消されていた街・追浜をフィールドワークします。京急の追浜駅に現地集合した参加者一行は、当会ガイドでもある中田さんの先導・案内により、駅前から真東・東京湾方向に伸びる夏島貝塚通りを進みます。

早速、少し進んだところで左に折れると、そこには小さな鷹取川に架かる「夫婦橋」。

追浜駅の南西方向にそそり立つ鷹取山で採掘された鷹取石を舟運していた所で、あとで巡る第三海堡の基礎材として大量に海中投入されましたが、1923年関東大震災による河床隆起のために採掘・舟運は終了したそうです。

さらに東へ進むと左に折れるT字路に、妙に道幅の広い「神応橋」が見えてきます。

かつて橋の先にあった工場から、長さ 30 メートルの航空機射出機(カタパルト)を運搬するため、道幅は広く橋脚も頑丈な構造にしたそうです。

なおも東へ進んで日産の研究所が見えてくると、その右側には斜面が道路際までせり出した小高い「鉛切山」が迫ります。

この山にも戦時中に地下壕が掘られ、手術室もある病院施設が存在したそうです。

そして、進行方向正面には1916年に開設された「横須賀海軍航空隊」が、左側の日産追浜工場のあたりには、広大な「追浜飛行場」が広がっていたエリアで、当時の航空技術の発展を推進する目的で、技術開発・実用実験・帝都防衛などを担っていました。

少し話がそれますが、「秋水」という試作機で終わったロケット局地戦闘機をご存じでしょうか。空襲に飛来するB29爆撃機を迎撃するために、高々度まで加速度的に上昇する性能を追求した、陸海軍が初めての共同開発をしていた戦闘機です。終戦間際の7月7日夕刻、まさにこの追浜飛行場で試験飛行が行われました。離陸には成功したものの、急上昇の途上でエンジンから発煙・停止したため、滑空しながら帰還をめざしましたが、飛行場の西端に不時着・大破した事故がありました。搭乗していた犬塚大尉は、先の鉢切山の病院壕に搬送されましたら翌日に亡くなり、「秋水」の開発自体も頓挫してしまったそうです。

そこからさらに進み、鉈切山を周り込むように右折・南進し、緩い坂を上ったところの追浜隧道をくぐります。隧道の左・東側一帯は、1932年に開設された「海軍航空技術廠」があったエリアで、当時はまだ弱小であった日本の航空機産業を、海軍自らが牽引・育成するために、各種の設計や試験、製造が行われていた施設でした。

さて、隧道の出口で頭上を見上げると、一見して道路の立体交差橋らしき構造物が架かっていました。これは、旧技術廠の施設のひとつである「等速試験水槽路」を延長するための土台となる



橋梁でしたが、終戦までに水槽本体の工事は完成しなかったそうです。その水槽路は本来、水上航空機の脚部に付いているフロートの形状などの試験を行う施設で、幅5メートル・長さ240メートルの規模だったそうです。実際に橋梁の脇に登ってみると、西に向けて100メートル程の細長い更地が広がっているのを確認しました。

隧道の先を左折・東に向かい、旧技術廠の深浦門だった所から一段高い敷地へ登ります。登った先は平坦で、東西方向に整然と建物が並んでいる工業団地になっていました。中には昭和の工場をイメージするような建物が多数残っており、それは旧技術廠の高速・高圧風洞場や第一研究所、第三工作工場などの建物を、ほぼ原形を残したまま各々の工場として稼働しているものでした。日曜日でもあり、周囲はひっそりと静まり返っていましたが、旧技術廠のかつての姿を彷彿とさせる光景と残存する建物の多さに、ある意味驚きと印象深さを感じました。

工場群を抜けるようにさらに東に進むと、深浦湾を望む道沿いに「旧技術廠本庁舎」の説明板と、1938年の「昭和天皇行幸」を記念する石碑が立てられています。本庁舎は残念ながら2004年に解体されてしまいましたが、説明板の画像から昭和モダンなしつらえであったことがわかりました。

続いて、その並びにある第四・第六研究所など旧技術廠時代からの残存建物を確認しながら、その先を左折して北に向かうと、正面には後に訪れる貝山が望めます。その貝山の南側にある浄化センターのあたりは、かつて予科練の兵舎があった所で、1930年に優秀な指揮官の育成目的で横須賀海軍航空隊に採用したのが、その始まりだそうです。予科練といえば霞ヶ浦・・という認識だったのですが、当時の情勢から大人数を採用し急速に養成する必要性が生じ、横須賀が手狭になったため、霞ヶ浦海軍航空隊に移転したのは1939年のことでした。

さて、貝山の西側をさらに北進し、山際に迫ったところに建つ工場の裏側に回り込むと、突然5メートル程の高さがあろう鉄扉が山肌に5つも並んで現れ、圧倒されました。これは可燃物庫だそうで、中を覗くと奥行は10メートル位、天井部分にはH鋼の鉄骨レールが円形状に設置されており、おそらく何か重量物を移動させるためのワインチなどを吊り下げたのではないかと思いました。さらに北へ進み夏島貝塚通りに戻って右折、再び東に向かうと、ようやく「貝山緑地(貝山)」への登り口に到着です。登り坂の途上にある、移転先不明の「追浜神社石碑」、「海軍航空発祥之地碑」、予科練にまつわる「豫科練誕生之地碑」と「鎮魂之碑」に触れるにつけ、あらためて追浜における海軍の特性に思いを巡らせながら頂上を目指しました。やがて、終戦まで海軍の気象観測所や軍用伝書鳩小屋、高角砲が設置されていたという頂上に到達。頭上のトンビに視線をくれながら昼食休憩ののち、展望台に登って右は逸見の街並みから、正面は軍港の裏側、左は東京湾までのすばらしい眺望を満喫してから、午後のフィールドワーク再開です。

まず、夏島貝塚通りの行き止り・東京湾の岸壁にほど近い夏島都市緑地に据えられた「東京湾第三海堡遺構」を見学します。私は、遺構の引上げ当時からぜひ一度見学しておきたいと思っていたので、貝山地下壕の見学と相まってまさに待望の機会となりました。ここからは、地元追浜で熱心に活動されている「NPO法人アクションおっぱま」の皆さんと、2グループに分けコースも入れ違えて、とても懇切丁寧にご案内くださいました。「第三海堡」とは、明治期に首都東京の防護のため東京湾岸一帯に築かれた24の要塞のうち、海上の人工島



東京湾第三海堡遺構

に砲台を備えた3箇所の海堡のうちのひとつで、対岸の富津岬沖に第一・第二が、観音崎沖に第三海堡が位置していました。1892年に着工しましたが、水深39メートルで潮流の激しい浦賀水道での建設は困難を極めて、約30年をかけて1921年に完成しました。完成当時のイメージ図によると、主要部は前方後円墳のような形で、方形の中程から円形とのくびれに向けて、タコ足のように防波堤が湾曲して伸びており、方形の底部と円形の左右に、それぞれ4門ずつ計12門のカノン砲が配備されていました。しかしながら完成から2年後、1923年の関東大震災により1/3が海没、その後も波浪により暗礁と化し、長きにわたり過密な船舶往来に危険をもたらす状況が続きましたが、ようやく2000年から構造物の撤去事業が開始され2007年に完了しました。糸余曲折を経て当所で保存・公開されているのは、探照灯・砲台砲側庫・観測所だった3つの遺構で、いずれも横須賀市と神奈川県の重文指定に、また文化庁から日本遺産に認定されているそうです。

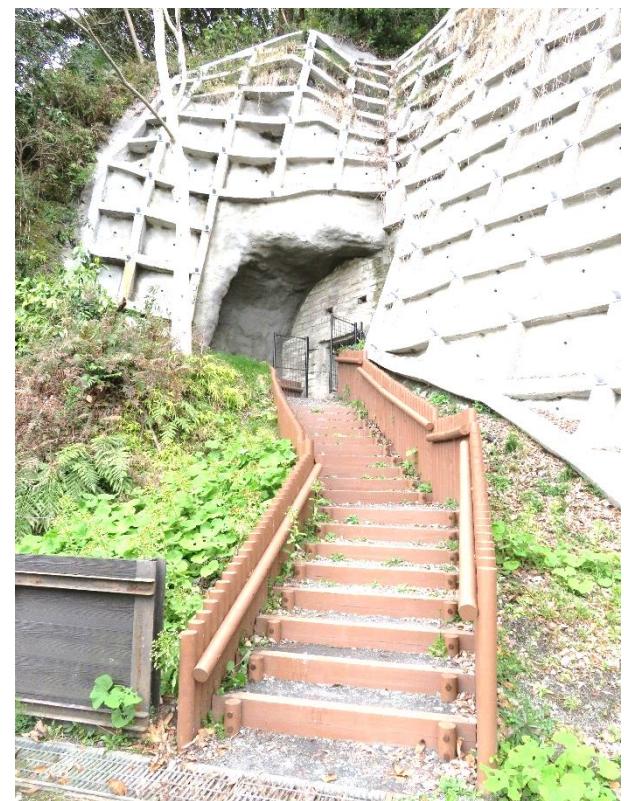
まず探照灯ですが、夜間の敵艦探知の施設で重量565トン、中央部に設置された直径2メートル程の赤く鋳びついた重厚な探照灯台座が印象的でした。砲台砲側庫は、字のごとく砲台横の弾薬庫であり重量540トン、砲弾を出し入れする小窓や上部には着弾確認などを行う観測所もありました。最後に見学した観測所は、指揮官の位置するところで、その用途から視界が広い高所に設置されていたもので、重量はなんと907トンです。日頃から日吉の連合艦隊司令部壕を見慣れているせいか、同じ軍用のコンクリート遺構でありながら、違和感・不思議さ・多様性を感じたのは、きっと私だけではなかったはず。連合艦隊司令部壕は掘り返す訳にもいきませんが、見学した遺構は陸上にパーツで並んでいてしかも重量表示付き、コンクリートの表面に木枠の跡は無く、外観・天井部などの一部には滑らかな曲線構造が見られたり、壁などの厚みも40センチをはるかに超える重厚なつくりで、通路のサイズも人ひとり分しかない箇所があったりと、日吉とは異なる点に多くの発見の機会をいただきました。阿久沢会長がガイダンスなどで引用される、連合艦隊司令部に向けた「日吉の穴から出て来て指揮せよ」との発信が日吉に対する前線からの印象だとすれば、海堡の遺構はまさしくその前線=戦闘を意識して構築された、攻撃と防御の要素が日吉よりも格段に盛り込まれた施設であったことに気付き、実感いたしました。

続いて夏島貝塚通りを渡って、貝山の東側にある最終ポイント「貝山地下壕」の壕口に移動します。「貝山地下壕」は、アジア太平洋戦争末期の空襲激化や本土防衛に備えるため、各種施設の地下化が進められた中で、横須賀海軍航空隊の施設として掘削された壕です。

資料不足のため、具体的な用途や手掛けた設営隊などの詳細は判明していないそうですが、ちなみに周辺の野島や夏島に掩体壕を掘ったのが、日吉キャンパスで最初に待避壕を掘った第三〇〇設営隊でした。



貝山地下壕内部



貝山地下壕入口

壕は下層のA・B地区、それより上層にある上部坑道の3エリアに分かれています。A地区は、高さ10メートル幅7メートルと断面が大きく、コンクリート通路を軍用トラックが出入りしていたようです。B地区は、唯一公開されている今回見学する壕で、断面は高さ5~7メートル幅5メートルと、連合艦隊司令部壕よりも少し大きめですが、素掘りで掘削されています。上部坑道には壁面に彫られた文字が残っていたり、まだ未調査の坑道も存在しているようです。

さて、ご案内いただくB地区の壕をめざすと、貝山の斜面に二車線道路トンネル程の大断面をもつコンクリートで覆われた壕が迎えてくれます。奥行は20メートル程で、中には碇マークのホーロー食器や電設部品など壕内で発見された出土品や関連資料が展示されており、壁面には米軍接收時代のものと思われる英文字での表記も残っていました。雨の日には、見学者へのガイダンスなどを行うのに好適なスペースだと思いました。そして、いよいよヘルメットを拝借して、左横に並ぶB地区の壕口に向かいいます。壕口は3~4メートル高い位置にあり、説明板と階段が整備され、周囲の斜面にはコンクリートの崩落防止壁が施工されていました。石積みの壕口をくぐってまずビックリしたのは、壕内の要所に設置された照明器具とインターホンシステムで、照明は壕口で一括点灯が可能、インターホンは外部との通話もできるそうで、設備のすばらしさに目を見張り、羨ましさを感じました。

連合艦隊司令部壕にも、もし同様の設備があったなら、緊急時でも安心・安全に案内誘導できるものと思いましたが、スタッフの方によると、公開のためにこの壕を整備するにあたっては、遺跡の保全という観点よりも、観光資源として生かすことに重点が置かれたそうで、そのため未だ調査不十分な状況にあるとおっしゃられ、日吉とは異なる側面があることに複雑な感情を抱きました。

さて、日吉の作戦室ほどの断面の素掘り通路を奥へ進んでいくと、床面には先の設備のケーブルが伸びて照明器具が薄明るく壕内を照らし、まだ搬出されていない遺物がまとめられていたり、錆びて朽ちた鉄扉の中を覗くと1メートル程低い部屋のようなスペースがあつたりと、興味は尽きません。突当りの朽ちた鉄扉の先は、一段低くなった通路が現れ階段を下りるのですが、同じ壕内でこんなに高低差があるとすれば排水はどうしていたのか、連合艦隊司令部壕のように排水のための勾配まで設計に盛込まれていたことを考えると、不思議に感じました。さらに奥へ進むと通路断面が狭くなり、床面に煉瓦が敷き詰められている箇所を確認し、脇に曲り込むと教室ほどの広さの四角いスペースもあり、会議や倉庫として使われたと推測されているそうです。煉瓦敷きの通路を奥へ進むと、コンクリート製で長さ2メートル程の水槽があり、最奥には煉瓦積みのかまどと外部に通じる排煙ダクトを通した溝が残っており、壕の機能の中にも日常生活を感じさせる部分が含まれていたことがわかりました。

見学を終えて壕を出た私たちは、最後に貝山の南側に回り込んで浄化センターの建物の裏手に進みました。すると山の斜面の2メートルほど高い位置に、高さ10メートル程のコンクリートで構築された大断面の壕が5つ現れて、それぞれ中には、金属製で直径3メートルはありそうな円筒形の燃料タンクが収まっていて、静かにたたずむ光景ながらも迫を感じました。

あらためて今回のフィールドワークでは、追浜の地下壕・コンクリート構造物などを実見し日吉と比較しながら、また同じ海軍であっても指令を出す日吉と現場たる追浜との立ち位置の相違に気付かされて、それぞれの地勢や背景、成立ちに思いを巡らすことができ、とても有意義な一日を過ごせたと思います。こうして無事に日程を終えた参加者一行は、かつてならば横須賀海軍航空隊の正門最寄りに位置する、京急バス追浜車庫前から帰宅の途についたのでした。

最後になりました大変恐縮ですが、何より懇切丁寧にご案内くださった「NPO法人アクションおっぱま」の皆さまと当会の中田さんには、心から感謝申し上げますとともに、将来に向けお互いの交流促進と活動発展を祈念いたしております。ありがとうございました。

報告 横浜大空襲から77年
「第27回 2022年平和のための戦争展 in よこはま」の感想

運営委員 小山信雄

5月29日の横浜大空襲の日に合わせて開催されてきた戦争展は、今年で27回目を迎えました。今回は、従来の開催場所（横浜駅西口かながわ県民センター）が現在改修中とのことで、初めて関内ホール（関内駅下車）で特別企画1（戦争・空襲）が5月28日（土）に開催されることとなり、会場のお手伝いと講演などを聴かせていただきました。尚、特別企画2（核のない世界を）は、7月16日（土）、改裝新たとなる横浜駅西口かながわ県民センターで開催されます。

当日は、13時開場（13時30分開会）でしたが、受付開始時間前から大勢のお客様の来場となり、受付のある地下1階への階段は長蛇の列で、会場はコロナ対策で席の間隔を空けながら、ほぼ8割方のお客様となりました。

今回の企画テーマは、「戦争・空襲」であり、横浜市立日吉台中学校演劇部による朗読劇で幕を開けることになりました。「子どもたちの戦争～沖縄少年ゲリラ兵の記憶」という劇で、日頃ほとんど知られていない「護郷隊」という沖縄の最前線に送られた14～17歳の元少年ゲリラ兵たちが負った心身の傷の深さなどが演劇部のみなさんから語られました。続いて「中学生の僕が体験した横浜大空襲&横浜市の姉妹都市オデーサ（オデッサ）のこと」のお話を、中学生の時に中区本牧で、実際に横浜大空襲の中を逃げ惑った柴田順吉さんに当時の生々しい体験を語っていただきました。NGOグローカリーからは、「横浜大空襲と女性から戦争を見る」のテーマで、当時実際に空襲を経験された女性の方々への実際の聞き取りを基にした証言の発表をしていただきました。

女優の五大路子さんからは、「夢と希望と平和を演劇に込めて」と題して、横浜大空襲をテーマにした「真昼の夕焼け」、「横浜ローザ」等の演劇を通して戦争と平和について考え伝えてこられたことを講演していただきました。様々な周りの意見などあった中、強い信念のもとに演劇を通じて長年訴えてこられたご本人のお話はとても迫力があり、1時間の講演に耳をそばだてました。心に響く言葉はたくさんありました。「どんな大変なことがあっても、前向きに生きる大切さを忘れてはいけない」「自分の判断をもつこと、意見を述べること、Answerを出すことが大切」。そして

（ ）の自分の解釈も加味されていますが、「（様々な悲劇のあったその場所は）今は面影は全くなく（平和裡に生活が営まれている）としても、現在の私たちは、こうしたことがあった世の中（場所）の上に立って、幸せに生きていることを改めて認識しなくてはならない」という言葉に深く納得しました。



五大路子さん

「平和のバラ」贈呈 NPOグローカリーの方々より、
 柴田順吉さん（左から2人目）、五大路子さん（右側）へ

お知らせ

第15期(2022年度)日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

慶應大学日吉キャンパスの地下に広がる戦争遺跡・日吉台海軍地下壕のボランティアガイド養成の実践講座です。過去の戦争遺跡を保存するだけでなく、二度と悲惨で無謀な戦争をくりかえさないために活用していくには、ガイド活動が不可欠です。物言わぬ遺跡をガイドし多くの方に見学してもらい、日本の戦争の過去を今に語り伝えましょう。この活動をいっしょにやってみませんか？

第1回 7月9日(土) 箕輪町集会所 13時～15時半

《私たちのガイド活動》保存の会の歩み・活動 見学会の進め方 全国の戦跡保存運動

☆ 定例見学会 7月23日(土)、7月30日(土)、または8月6日(土) 日吉駅集合 12時半

※保存の会が毎月行っている定例見学会に、実習として参加していただきます。

第2回 8月11日(木祝) 中原市民館2階・第2会議室 13時～15時半

《日吉の地下壕と海軍の概要》 パワポ映像での地下壕説明 日吉にいた海軍の諸組織

第3回 8月28日(日) フィールドワーク 日吉駅集合 13時～16時

《キャンパス外から見る海軍地下壕群》 日吉台の外周めぐり

第4回 9月17日(土) 会場未定 13時～15時半

《まとめ》 「ガイドの手引き」説明 私たちのめざすもの「語り継ぐ」とは？

フリーディスカッション、修了証授与

参加費 2000円(全4回分)

会場 箕輪町集会所 港北区箕輪町3-8-9 大聖院東側、諏訪神社内 日吉駅より歩12分
TEL045-561-6908

中原市民館 川崎市中原区新丸子東3-1100-12 武蔵小杉駅東口駅前広場の南側
TEL044-433-7773

申込先 ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号をご記入の上、
下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。問い合わせも下記へ。
横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方 「ガイド養成講座係」

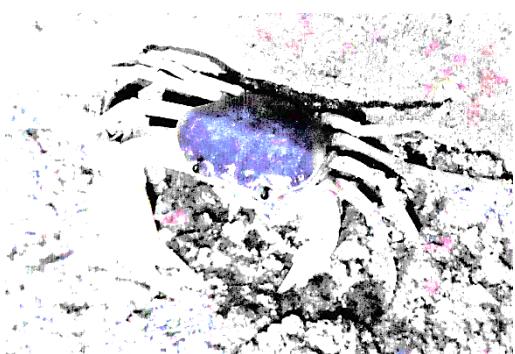
TEL&FAX 045-562-0443(午前・夜間)

主催 日吉台地下壕保存の会

出張授業

日吉台小学校の感想文から

副会長 喜田美登里



地下壕のサワガニ

2020・2021年は「コロナ」の影響で地下壕の見学会は中止された。毎年見学会を行っていた日吉地区の小学校6年生にはこの2年間、補足として地下壕の資料をお届けしてきました。

日吉台小学校ではPowerPointを使った「出張授業」を実施する事ができました。以下、いただいた感想文をご紹介します。

◇先生から

「先日は、6年生に向けて、日吉台地下壕のことや、戦時中の様子などお話しいただきありがとうございました。短い時間、かつ対面ではないという状況でしたが、子どもたちにとつて、学びの多い時間となりました。貴重なお話を、ありがとうございます。社会科担当をしている私ですが、やはりリアリティのある授業ができず、困っていました。「日吉」という身近な地で、「戦争」があったこと、子どもたちは強く受け止めていました。3月18日に無事72名卒業式を迎えるました。」

◇6年生の感想（2020・2021年度）

「今までの授業では、原爆で長崎や広島のことしか知らなかつたが、日吉のまちがこのように戦争にふかくかかわっていると知り、おどろきました。今回は地下壕にいけなかつたけれど、きいていると、すごく頭を使ひ考えて、場所をえらんでいることを知りました。」

「今まで学習してきたのは、戦争の内容だけで、細かい事はしらなかつたが、戦いのリアルタイムで指令をだしていくのが身近かな日吉だった事に驚いた。戦争は悪い事だとつくづく思った。これからも戦争を起さないようにし、今の生活に感謝して生きていきたいと思った。」

「日吉の地下壕通信室でツーツーという音が消えると、その人が亡くなっている話の、それを聞いていた人はたえきれない気持ちになっていた、という話が一番印象に残りました。後半の日本の兵器の話はもはや人を物みたいにあつかっていたので、こわくなりました。」

「社会で戦争について学んだ時は、日本の事などでしたが、日吉で起こった事を聞くと、日吉も戦場だったんだな、と実感した。小学校も戦争のために地下施設などがおいてあった事にビックリした。今、ウクライナで戦争がおこっていてニュースでみるように戦争は、私たち住民も巻き込まれる事なので、こういう事を知れてとても良い経験になった。」

お知らせ パネル展示会（日吉台地下壕保存の会）

日吉台地下壕、戦前の日吉の様子、太平洋戦争関連の展示を行います

場所：日吉の本だな（日吉図書取次所）

慶應義塾大学「協生館」1階 日吉駅（東急東横線・目黒線、市営地下鉄グリーンライン）徒歩1分

展示期間：7月4日（月）～7月23日（土）

開所時間：月曜～金曜 10時～20時 土・日曜、祝休日 10時～18時

お知らせ

◎パネル展示会（日吉台地下壕保存の会）

日吉台地下壕、戦前の日吉の様子、太平洋戦争関連の展示を行います

場所：横浜市港北図書館1階 “港北まちの情報コーナー”

展示期間：7月31日（日）～8月27日（土）

開館時間：9時30分～17時

※ミニレクチャー：展示会に来られた方々に保存の会の説明員がご説明します

日時：8月13日（土）、8月20日（土）共に14時～16時

◎講演会（日吉にある戦争遺跡について）

日時：8月6日（土）10時～12時 **場所**：横浜市港北図書館2階 会議室A

定員：当日先着40名（申し込み不要）

聞き取り

軍国少女・久保田幸子さん（94歳）のお話

（聞き取り日 2022年4月10日及び5月15日 東京都東久留米市にて）

運営委員 遠藤美幸

◇どんな子どもだったのか

昭和3（1928）年5月24日に、久保田幸子さんは東京の新橋のある斬家の娘として生まれた。ところが生後一週間で子宝に恵まれなかったある夫婦にもらわれたのである。その理由は「女の子」だったから。なんと「4番目の子どもが女の子だったらあげる」と実父が約束したのだ。その約束通りに幸子さんは海軍士官の帽子職人の家の子になった。育ての母は、

もらい子であることを他人に知られたくなかったので、小学校に上がるまで誰にも会わせず、誰とも遊ばせなかつた。ひとり遊びを好む手のかからない子どもだったが、もの（社会）を観る角度がふつうの子どもとはちがう「変わった子ども」だった。「自分は将来、満州に渡って馬賊になって満州の金持ちを襲って貧困者に施すんだ」と思い込んでいた。子どもながらにこの世の理不尽さと様々な格差を感じ取っていたのだ。近所に「鬼婆」と恐れられていた老婆が住んでいた。幸子さんは誰も近づかない「鬼婆」にも臆せずに会いに行った。その老婆は、幼児



久保田幸子さん

だからと軽んずることなく、幸子さんに「いいかい、自分の目で見ることが大事だ、それがすべてだよ」と教えた。

◇筋金入りの軍国少女

小学校1年生の時、学校の教科書がまったく面白くなかったので、1週間で「不登校」になりました。

「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」。一体どこのサクラが咲いたのか？

「ススメ、ススメ、ハイタイ ススメ」。一体どこに進むのか？

さまざまな疑問が生まれたが、周りはそうではなくて完全に浮いていた。まったく同じリンゴなど世の中にありえないのに、リンゴが1つとリンゴが1つでなぜリンゴが2つになるのか？算数も理屈に合わなかった。

学校の勉強に興味がわからなかったが、当時の新聞に面白さを見出していた幸子さん。新聞にはすべてルビが振ってあったので、子どもでも読めたのである。彼女は新聞紙上で謳われた「東洋平和」と「五族協和」を掲げた「正しい戦争」の圧倒的な支持者となり、クラスの誰より時局通だった。こうして筋金入りの「軍国少女」になるべくしてなったのである。

小学校3年生の時の夏のある日、養父が心臓麻痺で急逝した。死に際に「母と弟を頼む、お前が跡継ぎだ」と言わされた。弟も「もらわれた子」だった。

養父を亡くしてからも「もらわれた子」として親戚からの目線を気にしながら生きざるを得なかった。誰にも頼ることができない、父との約束で母と弟の面倒をみなければならないとの信念で生きた。戦中も戦後も、まだ10代の少女の幸子さんは養母と弟を養うためにいろいろな仕事を転々とする。10代の少女が背負った「責任」の重さ。少女時代に「子ども」として生きられなかつた幸子さん。今風にいえば、典型的な「ヤングケアラー」である。

◇海軍艦政本部理事生時代

1945年4月に目黒の女学校を繰り上げ卒業した幸子さんは、海軍士官の帽子職人だった娘のコネを頼って海軍艦政本部（分室）の理事生として、4月から8月15日まで働いた。分室は現在の日本赤十字社本社（東京港区芝）の目の前にあった。理事生が5、6人いた。幸子さんは分室では海軍傘下の工場の目録作りをしたことを覚えている。軍艦に乗船していた軍人が給料をもらいに来ていた。

他には学徒動員で東京帝国大学の学生が5人くらいいた。経済学部の岩田さん、緑川さん、金沢さん…。軍人は木村中尉ただ一人で他は皆民間人であった。木村中尉も東京帝大出身の経理将校であり、今思えば非常にリベラルな考えの持ち主であった。そのためかこの分室では割に自由な空気が流れていて軍人も帝大生もいろんな話をしていた。

6月に緑川さんが出征する際に、その送別会で木村中尉は自らドイツの反戦歌を歌った。木村中尉は「今は6月だぞ、もう少し待てば、もっと違う道が開けるかもしれないのに、志願して行くなんてお前は大馬鹿だ。突撃命令が出たら、一呼吸してから飛び出せ。」と命令した。つまり「命を惜しめ」という意味だったのだが、当時の幸子さんは「深呼吸して飛び出ろ」と理解した。

8月6日に広島に、9日に長崎に原爆が落とされた。12日の日曜日に東京に原爆が落とされるという海軍機密情報が流れた。「混乱をきたすから、家族にも誰にも言うな」と厳命された。同僚の帝大生の岩田さんは、幸子さんも出てこないと思っていたのか、「俺は12日は出勤しない」と言った。内心、この人を卑怯者と思った幸子さんは岩田さんの代わりに12日に覚悟の上で出勤した。結局、12日に原爆は落ちなかつた。偽情報の口止めなのか…、この日、分室から理事生たちはバニシングクリーム（保湿クリーム）が1個配られた。

13日に岩田さんが出勤して、「昨日お前は出たのか」と聞いたので「はい、出ました」と答えると、その人は幸子さんの肩をぎゅっと掴んで揺さぶりながら「お前は日本一の馬鹿者だ」と叫んだので、「あなたこそ卑怯者だ」と言い返した。岩田さんは箱根の山を越えて

静岡まで避難していたのだ。この時、幸子さんは、自分はともかく母や弟に理由をつけて東京を離れると一言も言わなかつた自分に対して何にも思わなかつたのである。

◇艦政本部で敗戦を迎える

8月15日の天皇の「玉音放送」も艦政本部で聞いた。はっきりと聞き取れなかつたが戦争に負けたことは分かって皆で泣いた。ただ、幸子さんは「なんでこんな時に戦争を止めるのか、これまでに掲げてきた東洋平和や五族協和という思想が正しいものであつて、そのために戦争をしたのなら、その理想を貫けるまで戦うべきだ」と思ったので、釈然としない複雑な思いで放送を聞いた。放送後、たちまち「重要書類を焼け」という命令が出され、分室の庭で、とりもなおさず書類を積み上げて次から次へと全部焼いた。その中の書類に関東地区のどこかの毒ガス工場に関する目録があつたことを覚えている。

それから天皇の放送が終わって1時間もたたないうちに、「袋を持って来い」と大騒ぎ。メリケン粉の配給が始まった。「時計もあるぞ」、「蚊帳もあるぞ」、「石鹼もあるぞ」。これが日本帝国海軍の艦政本部なのか……。幸子さんは非常に戸惑つた。ふと見ると、あれほど自分を馬鹿呼ばわりした帝大生の岩田さんは、そういう備品には一切目も触れず、紙と謄写版だけ持って帰つた。後で聞いた話だが、岩田さんは「戦いは終わつた。これからは俺たちの時代が始まる！」というビラを新宿の街で撒いていたそうだ。「あ、あの人はそういうことを思つていたんだ、だからあの人は死ねなかつたんだ、こうなることを知つていたんだ」と初めて気付いた。敗戦の日、幸子さんはメリケン粉をもらって帰つた時、叔母（母の妹）に、「お前たち若い者がだらしないから日本は負けたんだ！お前は今まで何をしていんだ。」とひどくののしられ悔しい思いをした。ただ8月15日の夜のスイトンはわずかだが量が多かつた。

◇次世代へのメッセージ

以下は、次世代に向けて久保田幸子さんから頂いたメッセージである。

一つ目は、「戦争というものは、兵隊だけではなく、人間そのものの本性をかえてしまう。いろいろなことを考えようとしてきた人間が、戦争になるといろんなことを一切考えようとしなくなる、これが戦争。ロシアを侵略国というが、かつて日本も侵略国だった。中国で『三光作戦』のような『焼き尽くす、殺し尽くす、奪い尽くす』という酷いことをやつた。侵略戦争を起こしたその責めを負つてこなかつた日本だから…こうなるんだ、ということを誰も言わるのはおかしいではないか。日本人は、ロシアのウクライナ侵攻を目の当たりにして、かつての日本の満州侵略をどう考えるのか、まずは足元見つめるべきである。

二つ目は、戦争の止める時機について。ロシアのウクライナ侵攻に対して「とにかく今すぐ戦争を止めるべき」と訴えられた。「戦争が長引けば長引くほど死ななくてよい非戦闘員が大量に死んでしまうからだ。子どもも女性も老人も根こそぎ死んでしまうからだ」。TVに映る戦場の子どもたちの姿に、幼き日の幸子さんの姿を見るような気持ちになつた。幸子さんは「私はポツダム宣言から原爆投下までの1週間を経験してきた人間だ。77年前、あの1週間で戦争をやめいれば……原爆投下はなかつたかもしれない。」と語る。その1週間の「重み」を背負つてきた幸子さんの語る言葉の「重み」に圧倒された。

三つ目は、「戦禍の中では、人は放置された死体にも、自分が死ぬことにも、町が消えることにも、だんだんと麻痺して普通の人間の心情が消えてしまう」。

1945年3月10日の東京大空襲で、幸子さんは、家が焼失し何もかも失つた大人たちが、嘆き悲しむのではなく「何もなくなつてさっぱりした」と口々に交わしていた言葉を覚えている。当事者でないと語れない衝撃的な言葉である。戦禍では人々の普通の感情が麻痺し、兵士たちの残虐性はエスカレートするのだ。

最後に、軍国少女だった頃のような一途な眼差しで「だから戦争をしてはいけないのです」と久保田幸子さんはキッパリと語つた。

連載

海外戦跡巡り(20) ホテル便り(上) ヤマトホテル 中国
運営委員 佐藤宗達

1905(明治38)年9月、米国ポーツマスで日露戦争の講和条約が締結され、日本は関東州の租借権、長春—旅順間の鉄道の譲渡などを獲得し、翌年南満州鉄道を設立した。長春—大連間を縦断する満鉄線を欧亜連絡鉄道に組み込んで上海・香港航路へと繋げる一大幹線とするためには、その路線に西洋人が快適に滞在できるホテルを確保することが必要であった。また関東軍をはじめとする軍人、満州国官吏、満鉄職員などの宿泊にも必要で、豪華な宴会場は軍人たちの会合に使われたのであろう。

「大連ヤマトホテル」ですが、大連は欧亜連絡鉄道と上海航路の接続点であり、日本から満州への玄関口であり、満鉄本社があった。それゆえ欧米の一流ホテルに伍する格式が求められた。

1907(明治40)年8月、旧ダーリニーホテルを改装して開業したが1914(大正3)年3月に大連中心部の大広場(現中山広場)前に新館が開業した。完成までに4年を要したという当時としては巨大なホテルで客室数115室・収容人数175名を誇った。外観はイオニア式ジャイアント・オーダーが8本並ぶルネサンス様式、正面玄関には鉄製のキャノピーが設けられた。現在は大連賓館として営業を続いている。エントランスホールや宴会場などは当時のクラシカルな装飾が維持されている。

「奉天ヤマトホテル」は1910(明治43)年、東京駅を模した赤レンガの奉天駅に併設されたステーションホテルとして開業、1929(昭和4)年、奉天大広場(現中山広場)前に新館が完成(客室数61室)営業を開始した。内外装はアールデコ調のデザインが施され、外壁は白色のタイル貼り仕上げとされた。館内には長期滞在者向けの設備が設けられ、当時は最新かつ最高格式のホテルであった。現在は遼寧賓館として営業している。ロビーの椅子に



大連ヤマトホテル(現在:大連賓館)



奉天ヤマトホテル(現在:遼寧賓館)

座ると中二階が見え、かつては楽団の演奏が流れていた事を窺わせる。

その他にも旧ヤマトホテルが現存しており「長春ヤマトホテル」1909(明治42)年開業、満州国成立後は新京ヤマトホテルに改称、現在は春誼賓館として営業中「哈爾濱ヤマトホテル」1937(昭和12)年、元東清鉄道ホテルを改装して開業した。現在は龍門大厦貴賓館として営業中。いずれも当時の風情が偲ばれます。

連載

地下壕設備アレコレ【34】

日吉に先立つラバウル大地下壕—ラバウル司令長官の回想記より—

運営委員 山田譲

日吉の連合艦隊司令部参謀長だった草鹿龍之介中将の前任地は、ラバウルでした。ここで南東方面艦隊司令部参謀長をつとめたのですが、司令長官は従兄の草鹿任一中将でした。この草鹿任一中将は『ラバウル戦線異状なし—現地司令長官の回想』(中公文庫、原著は1958年刊)という回想記を書いています。

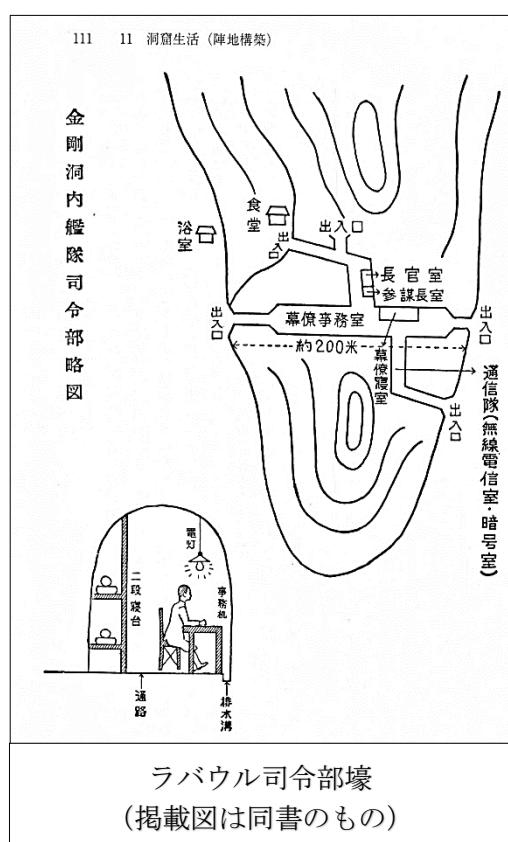
ラバウルというのは、現パプアニューギニアのニューブリテン島北東部の港で、昭和17(1942)年1月23日に日本軍が占領しました。海軍はここに大規模な航空基地をつくりました。その南東にガタルカナル島があります。日本軍のガタルカナル撤退=敗走の後、海軍ラバウル航空隊は米軍航空隊と死闘をくりかえしました。しかし米軍空母機動部隊は前進して北方のトラック島を大規模に空襲し、その防衛のためにラバウルの航空隊は昭和19年2月20日にすべてトラック基地に移動してしまいました。航空隊のいないラバウルに軍事的価値はありません。米軍はここを素通りし、トラック島も飛びこしてマリアナ諸島へと向かっていきました。

◎昭和19年3月から地下壕築造・地下へ移住

制海権を失い補給の途絶えたラバウルは、10万人の陸海軍将兵をかかえたまま「立ち枯れ」の籠城になってしまいました。しかし米軍の小規模な空襲は続けられました。こういう中でラバウルの陸海軍は、自給自足の農耕と地下壕の築造で敗戦までの1年半を耐え忍んでいました。この間に掘り込んだ地下壕は大部分は素掘りですが、昭和19年11月時点で「海軍70km、陸軍80km、合計150km」とのことです。その後も地下壕の拡張を続けたそうで、草鹿任一氏は「終戦時には恐らく前記の倍近くの長さになっていただろうと思う。」と書いています。

はじめに築造したのは艦隊司令部地下壕で「金剛洞」と称し、「3月31日に本拠をここに移し、司令部員約千名が終戦までここに居た」そうです。ここには長官室、参謀長室、幕僚事務室、幕僚寝室、通信室があり、壕外には食堂と浴室も完備していました。また、兵士の居住壕、倉庫、弾薬庫、病院壕を設け、陣地壕とその連絡壕も掘削していきました。

ラバウルは熱帯雨林の地域ですから、「穴の中は掘り方と地形により風通しの……悪い所もあり、土質によっては天井や壁からジクジク水が流れ出して湿気の多い不衛生な場所もある。そういう所は風抜きを作るとか、排水の溝を設けるとかいろいろ工夫」していました。これは日吉の地下壕と当然ながら共通ですね。というより、このラバウルの地下壕づくりの経験にもとづいて海軍施設本部は地下壕「築城」の工法指示書をつくっていたと思います。これにしたがって日吉の地下壕も築造されたわけです。—『基地設営戦の全貌』(佐用泰司・森茂著)には「ラバウルの戦訓は、施設全般の地下移転を促し、海軍においては終戦時に約80万平方メートルに及ぶ小型隧道を有するに至ったが、これらは主として燃料、爆弾、火薬、兵器資材、糧食等の重要器材を格納し、人員を待避し又は居住せしめ、敵の砲爆撃に対し被害を局限せんための急速施設であって、『築城隧道』と呼ばれていた。」と書かれています。—



草鹿任一氏によると「この穴掘り作業は……大部分は人力による手掘りによる約十ヶ月昼夜突貫工事をもって、春から始めて歳の暮近くまでかかり、まず一段落をつける形となつた。」ある場所で「大防空壕を造り、中に井戸を掘ったところ、偶然一部から温泉が湧き出たので、そこに風呂場を設けた」こともありました。

病院壕は「昭和19年4月より掘り始め、昭和20年5月には1200名収容で手術室、レントゲン室完備。「特に換気に注意して通風孔を多数設ける」という本格的なものでした。

大砲や機銃を据え付ける陣地壕は、つくってみて大砲の試射をしたら砲兵が頭痛、めまい、吐き気をもよおしてしまいました。発砲による一酸化炭素中毒でした。それで外気通風のために砲台背面側を開くようにして、扇風機や排気管も取り付けました。また山頂には「洞窟式の指揮所」をつくりました。

◎ラバウルの海軍設営隊は6部隊

地下壕の築造は、当然陸軍との協議分担にもとづき進められました。ラバウルの陸軍は第8方面軍で司令官は今村均大将でした。陸軍には工兵部隊がいます。とはいえ陸軍のことは草鹿任一氏の管轄外なので、この本にはほとんど書かれていません。他方、設営隊のことは詳しく書かれています。

艦隊司令部の施設関係の主務参謀は碇壮次大佐でした。このもとに第8海軍施設部、第28設営隊、第211設営隊、第212設営隊、第101設営隊、第34設営隊が置かれています。

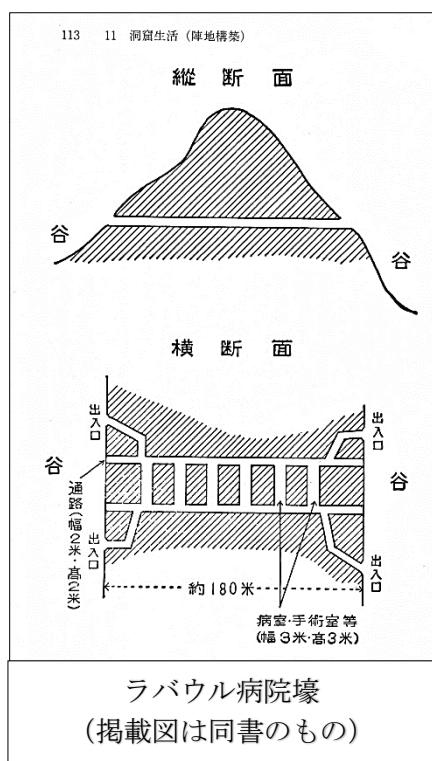
この設営隊の隊員たちは「大部分正規の軍人ではない徴用の軍属の人達からなつていて、その中には若い人もおれば相当の年配者もあり、種々雑多で、軍隊教育を受けた人は少なく、体格も比較的劣っていたようだ。それに持つてある作業用の機械類は一般に貧弱であつたから、一方ならず仕事に骨が折れた」と書かれています。

この中の第28設営隊隊長・江成五郎少佐の手記が引用されています。この部隊は昭和18年2月に呉で編成され、江成隊長は高等商船学校の出身者でした。貨物船2隻は途中で米潜水艦の魚雷が命中し危ういところをなんとか切り抜け、ラバウルに到着しました。まず初めの仕事はトベラ飛行場建設でした。その工事のために原住民も使い、隊員の中にはマラリヤや空襲で戦病死者も出ましたが、コンクリート滑走路の飛行場は8月にようやく完成しました。しかしその後「毎日の空襲に文字通り荒野の原となり、これを万難を排して急速復旧する。また翌日は荒野と化す、また修復する、皆實に嘗々たる努力であった」と書かれています。江成氏本人も、空襲で九死に一生を得るような体験をして負傷もしています。

この本には穴掘りとともに、ラバウルの食料自給農耕作業のことも詳しく書かれています。地下工場もありました。また制海権を失っている中での、潜水艦による補給輸送作戦（「鼠輸送」と呼ばれた）や、小型機帆船による「蟻輸送」のことも書かれています。興味のある方は、本書をお読みください。

ラバウルの陸海軍10万人の将兵は、昭和20年8月15日無条件降伏によりオーストラリア軍が進駐してきて、その捕虜となりました。その後、昭和21年3月頃から復員輸送が始まり、3カ月くらいで帰国完了し、草鹿任一氏も今村均陸軍大将とともに戦犯容疑を受けたものの無事帰国しました。

地上戦で地獄のような敗退と飢餓に苦しみ、戦病死者続出だったフィリピンや硫黄島の海軍陸戦隊とはだいぶ様相が違いますが、わずかな食料に耐えながら延々と苦しい穴掘りを続けていたのがラバウル航空隊・陸戦隊でした。こういう戦場もあつたのであり、少なくない兵士たちが、ここで戦病死していったことを忘れてはならないと思いました。



☆活動の記録 2022年3月～6月

- 3/18(金) 会報149号発送(来往舎 小会議室)
- 3/26(土) 定例見学会 参加者4名 ガイド4名
- 3/27(日) 貝山地下壕、第三海堡、海軍航空技術廠跡見学会
(ガイド・NPO法人アクション
おっぱま) 14名参加
- 4/3(日) ガイド学習会(日吉地区センター)
9名
- 4/7(木) 運営委員会(慶應義塾高校
多目的室) 10名
- 4/23(土) 定例見学会 20名
- 4/27(水) 地下壕見学会 慶應義塾高校
卒業研究 12名
- 4/30(土) 地下壕見学会 慶應義塾大学日吉学 9名
- 5/10(火) 「近代日本と慶應義塾」福澤研究センター日吉設置講座 「戦没塾生上原良司
が問いかけること」亀岡副会長(第4校舎J14教室)
- 5/12(木) 運営委員会(慶應義塾高校 多目的室) 9名
- 5/18(水) 地下壕見学会 慶應義塾日吉キャンパス事務センター研修 11名
- 5/24(火) 「近代日本と慶應義塾」福澤研究センター日吉設置講座「キャンパスの戦争
遺跡」阿久沢会長(第4校舎J14教室)
- 5/28(土) • 定例見学会 25名
• 「平和のための戦争展 in よこはま」特別企画1 戦争・空襲(関内小ホール)
参加者 160名
- ★特別企画2 核のない世界を(7/16(土))・展示(7/15(金)～17(日))
かながわ県民センター
- 6/2(木) • 運営委員会(慶應義塾高校 多目的室) 11名
• 地下壕整備保全に関する現地確認(地下壕) 5名(日吉キャンパス施設環境
担当2名、安藤教授、阿久沢会長他)
• 7月の図書館展示について打ち合わせ(港北図書館)



横浜山下公園のバラ(横浜ローズガーデン)

○地下壕見学会について

現在、定例見学会は月1回(第4週土曜日13時～)定員30名で実施しています。感染対策を行いながら進めています。

6/25(土)・7/23(土)は閉め切りました。夏の見学会は7/30(土)・8/6(土)です。

★8/27(土)は日吉キャンパス事務センター休みのため、実施しません。

★お問合せ・申込みは見学会窓口まで

Te1/Fax 045-562-0443 喜田 (午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会